～日本小児科学会の「知っておきたいわくちん情報」～

B型肝炎ワクチン

No.12

どんな病気ですか？

- B型肝炎はB型肝炎ウイルスの感染によって、肝臓の細胞がこわれたり、その影響で肝臓の働きが悪くなる病気です。
- B型肝炎ウイルスの抗原・抗体やB型肝炎のウイルスの量を血液で検査して診断します。
- 感染後の経過には2通りあります。一過性感染と持続感染です。一過性感染とは感染した後、一定の期間後に感染が良くなることです。持続感染とは、良くなることなく、ウイルスが体の中に残り続ける状態です。
- 感染した後、すぐに症状が出る場合を急性肝炎といいます。疲れやすい・発熱・黄疸（体や眼が黄色くなる）などが主な症状で、感染した人の約20～30%にみられます。
- 感染してから急性肝炎が発病するまでの期間は60～90日です。
- 持続感染になった人の約85～90%の人は無症状で経過しますが、約10～15%の人は慢性肝臓病（慢性肝炎、肝硬変、肝臓がん）へ進行します。
- 出生時や乳幼児期での感染は症状がない状態で経過することが多いですが、持続感染になりやすいという特徴があります。

ワクチンをいつ、何回接種しますか？

定期接種

1回目	2回目	3回目
	4週間後	1回目の接種から20～24週後
生後2か月※	生後3か月	生後7～8か月

※家庭内に感染リスクのある場合などは、出産直後からでも接種できます。

3回接種します。定期接種と母子感染の予防では接種スケジュールが異なります。

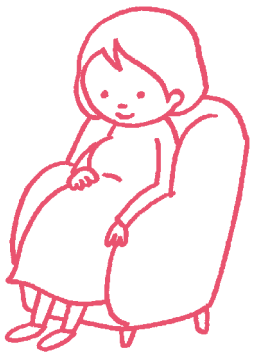
生後12か月までは定期接種です。定期接種の時期を逃しても、任意接種としてどの年齢でも接種可能です。その際、1回目から2回目の間を4週間、2回目と3回目の間を16～20週間（1回目から20～24週間）あけます。

お母さんがB型肝炎ウイルスに感染している場合

※母子感染の予防

1回目	2回目	3回目
	4週間後	1回目の接種から6か月後
出生直後	生後1か月	生後6か月

母子感染は持続感染に特になりやすいので、接種を始める時期が早くなっています。また、生まれてすぐにB型肝炎免疫グロブリンも接種されます。接種費用は健康保険で支払われます。



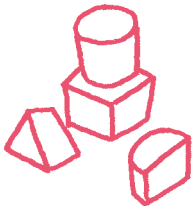
ワクチンの効果

乳児期に接種すると、ほぼすべての赤ちゃんが免疫を獲得することができます。3回のワクチン接種後の効果は20年以上続くと言われていますが、免疫の獲得や持続期間には個人差があります。

ワクチンの副反応

B型肺炎ワクチンは多くの国で赤ちゃんに接種され、安全なワクチンであることが確認されています。

発熱、発疹、接種部位の痛み・かゆみ・はれ・しこり・発赤、吐き気、下痢、食欲が落ちるなどがみられますが、いずれも5%以下とまれです。この症状は回復します。



どのように感染しますか？

B型肝炎ウイルスは、血液や体液を介して感染します。

主に3つの経路があります。1 B型肝炎ウイルスに感染しているお母さんが出産する時に感染する（母子感染）、2 ウイルスを含む血液や体液が皮膚や粘膜の傷から入る（接触感染）、3 性行為です。

以前は、輸血など医療に関連する感染や母子感染が大きな問題でした。しかしながら、輸血用血液の検査やB型肝炎ウイルスに感染しているお母さんから生まれた赤ちゃんへの予防対策によって、これらの患者数は減少しています。

一方で、父子感染や家族内での感染がなくならないことから、全ての子どもたちをB型肝炎から守るために、2016年10月よりユニバーサルワクチン（全ての赤ちゃんへの接種）が定期接種のワクチンとして始まりました。

ワクチンが接種できない人は誰ですか？

接種を受けることができない、いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によってアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことがある場合
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合

接種を受けるにあたって注意が必要な人

接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後２日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- ワクチンの成分に対してアレルギー反応を起こすおそれのある人
- 妊婦または妊娠をしている可能性のある女性

発　行　日本小児科学会
2018/03作成　ver.1